

常なる磐

つねなる いわ

令和2年11月20日(金)
その1

◇ きっかけ① 記念式典に向けた準備の経過を振り返る

4年間の長きにわたり、準備を進めていただいた「創立120年ならびに移転新築34年記念行事」については、万全の準備が式典を温かみのある催しへと導き、感動を添えながら滞りなく一切の幕を閉じた。

これまでご支援いただいた関係各位に感謝申し上げますとともに、今後も、変わらぬご支援、ならびにご理解とご協力をお願い申し上げます。

さて、表題の「きっかけ」というのは絶妙な存在で、その「きっかけ」を境に事が善きに転じることは多々あることである。

(※事が悪しき方向に転ずる場合、「きっかけ」は使わずに「発端」や「ひきがね」を用いる。)

ただし、「きっかけ」とするかどうかは、その人にゆだねられるといってもよい。絶妙なタイミングだと悟って「きっかけ」とするのか、ぼうっと聞き逃し、見過ごして好機を逃すかは、受け手の心持ちが大部分を占めるのだ。

これまで幾度となく好機を逃してきた自分であるが、今回は違った。

4・5月の休校期間中、何かできることはないかと考えて行動に移したのが高圧洗浄機による桜の洗浄(ウメノキゴケの除去)。これが環境整備の始まりである。

洗浄機の扱いに慣れてないものだから、時折、狙いとは見当違いの方向に高水圧の水が流れ飛ぶ。そこで、たまたま地べたのタイルに集中的に水圧がかかり、タイルがきれいになることに気付いた。この場面、まさに「きっかけ」である。

試しに近辺のタイルに水圧をかけると、とてもじゃないが除去できそうもない経年によるこびり付き汚れも、根気よく水圧をかけると徐々に取れていく。そう、通信番組で見たあの場面。頭の隅の記憶と現実がつながった。『こういうことか』

桜の洗浄後にタイル洗浄に切り替え、しばらくして汚れは経年の泥汚れではなく、コケによるものだと認識した。傷んだ海藻のような、ヘドロのような生臭い匂いである。この匂いと激しい洗浄物の跳ね返りに気持ちがめげそうにもなるが、こういう時に声が掛かる。新品同様とはいかないが、汚れが取り除かれて美しくなったタイルを評した「黄色い声」だ。本校の教頭は、これが実に上手い。絶妙のタイミングで声が掛かるから、またエンジンがかかる。これも「きっかけ」。

このように、「きっかけ」となる好機に巡り合えるよう、神様が上手に与えてくださる。それを受け入れられるかどうかは、エネルギー源の有無であると考える。

そう、最大のエネルギーは子供である。

休校が明け、子供たちが登校するようになると、ちゃんとタイルの変化に気付く。さらに、そのことを口に出してつぶやくから気持ちがよい。素直な思いが真っ直ぐに伝わり、なおのこと嬉しさは増す。さらに、子供の下校時に作業をしていれば、姿を見かけて「がんばって」と声が掛かる。

教員は誰でもそうだが、いくつになっても、立場が変わっても、子供のためなら頑張れるものだ。子供の存在こそエネルギー源であり、「きっかけ」をも不要とさせるのだ。

エネルギー源があるから、洗浄作業はまだまだ続く。

タイルを洗浄しながら、次を考える余裕が出始めた。タイルの次は壁面である。本校の造りは、立地上、構造を加味して他校よりも壁が多い造りになっている。水平な地面に比べ、垂直な壁面はそんなに汚れないだろうと思われるかもしれないが、そうではない。コケは強敵だ。水分を含んだ多少の汚れがあれば容易に繁殖できるらしい。

壁面洗浄と地洗浄の大きな違いは、汚れの跳ね返りだと気づいた。顔面への跳ね返りは普通にある。ここで活躍したのは防護眼鏡ではない。フェイスシールドである。コロナ対策用品が他の場面で大活躍、といったところだ。

洗浄作業が日常になってくると、今まで気にもしなかったことが見えてくる。これも次なる「きっかけ」となっていく。

今回はこれぐらいに留めて次号へ つづく。

★その1の結論

「きっかけ」は連鎖の兆しがある。

その連鎖の兆しを受け止められるかどうか重要。

兆しを受け止め、「きっかけ」を連鎖させてこそ、好転へと導く。

常磐東小学校 校長だより

常なる磐

つねなる いわ

令和2年11月20日(金)
その2

◇ photo より… 環境の変化 に見る 天の恵み

タイトルのごとく、まずは2枚の写真を見比べていただきたい。



10/28(水)撮影

撮影時間は異なるが、大きな違いは樹木が纏(まと)う「葉」である。



11/18(水)撮影

紅や茜、黄金色と、あんなに鮮やかだった葉を、3週間ばかりですっきり落とした。正確に言えば、15日(日)まではちゃんとあった。

いや、この日まで【がんばった】のではないかと思える。学校の記念日を祝うために、校庭の樹木も応援していたのである。

式典の校長謝辞の際、壇上に立って校庭を望んだ時は、燃え上がるような紅葉が目飛び込んだ。毎日眺め、心を癒したいつもの紅葉を見て、心が落ち着いたのではっきりと覚えている。

一気に落葉したのは、月曜日。南側の2本の大木アメリカカフウ(楓)も同じ。急に冷え込んだわけでもなく、どちらかと言えば陽気がよかっただけに不思議だ。まさに「天の恵み」。そう捉えた。

手前味噌になるが、**15**日の記念式典は【心温まる行事】となった。参列いただけなかった学区民の皆様、本書を通じ、改めて謝辞を述べたい。

本校が産声を上げて**120**年。**120**年という数字は特別です。**60**年の還暦をふた回り。形で表現するなら、「赤丸の二重丸」です。

このめでたき式典を催すにあたり、岡崎市長 中根康弘 様、教育長 安藤直哉 様をはじめ、地元選出議員の皆様、歴代の校長先生ほか、多くのご来賓の皆様にご足をお運びいただきました。高いところではありますが、御礼申し上げます。

また、本式典を計画し、4年の長きにわたり準備を進めてくださった、発起人の中根委員長をはじめとする実行委員の皆様、誠にありがとうございました。

さて、複雑な社会情勢のもと、本式典は屋外で開催する形となりました。しかし、本校の歴史を紐解けば、まさにこの場所こそ本式典にふさわしいと考えます。向かって右手にある校歌碑は、「創立**60**周年記念碑」、左手の校訓碑は、「創立**70**周年記念碑」で、いずれも旧校地から移設したものであります。また、手前には移転新築記念碑の「希望の塔」が子供たちの成長を見守っています。さらに、この場所からは、校庭北側の「移転新築**10**周年記念モニュメント」を望むことができます。

まさにこの場所は、本校の歴史そのものであります。

本式典を迎えるにあたり、先人が築かれた功績を讃え、職員で記念碑の文字を着色して、歴史の灯を再点灯させました。今、陽光に照らされて白色に光る文字に、本校の輝かしい歴史を感じずにはいられません。さらに、移転新築当初の姿に近づけようと、校内各所のお色直しを行いました。

驚くべきは、子供たちが行動を起こしたことです。上級生から、校内の木製看板や池の後方にある「ギョギョランド」の看板を塗り直したいとの声上がり、再着色により、再び命を吹き込んでくれました。

新たなものをこしらえるのではなく、残されたものを生かして再生する。これこそ「歴史のつながり」であり、「先人の思いに応える」ということです。本式典のテーマは「新世紀」。新たな始まりですが、過去を敬い、繋げてこそ、真のスタートと言えます。

皆様のおかげをもちまして、次なる六十年に向けての準備は整いました。「常磐東っ子**120**年宣言」のように、今後は、子供たちが常磐東の「ひかり」となって地域を愛し、力を尽くしていきます。そして、赤丸三重丸の**60**年後には、地域を支える立場として、学校を応援してくれることでしょう。

全校児童による鼓笛演奏で式を締めくくります。学校再開以降、敬老会と学芸会の開催方法の変更により、発表する場がないまま練習のみを重ねてきました。最初で最後の、そして待ちに待った本番演奏になります。宣言の思いを重ね合わせた子供たちの演奏を、是非ご覧いただきたいと思っております。

最後に、校歌の一節にある「正しく鍛える身と心」を信条とし、本校のさらなる発展に向けて精進することをお誓い申し上げ、謝辞といたします。

令和2年11月15日 岡崎市立常磐東小学校長 近藤善紀

常なる磐

つねなる いわ

令和2年11月27日(金)

◇ photo で見る学校環境 【ピロティー周辺】

<校訓「求めて はげむ」碑>旧校地より移設



- ・ 創立 70 周年記念碑 & 同窓会発会記念碑

- ・ 昭和 47 年 11 月 建立

- ・ 同窓会より寄贈

- ・ 旧校地より移設

※旧校地では中央玄関横に設置



★設置時は文字彩色なしの地彫り➡白色で彩色

★成長した芝を刈り込み、雑草の抜き取りおよび管理は、現在も3年生が継続的に行っている。

<校歌碑 体育館への渡り通路>



◆H63 移設当時

- ・ 創立 60 周年記念碑
- ・ 昭和 39 年 3 月 建立

◆H23 三浦校長が彩色

- ※創立 60 周年は S37 年、記念式典は S39 年に開催
- ・ 寄付者より寄贈

◆現在 R2.11

- ※寄付者：碑裏面に刻銘

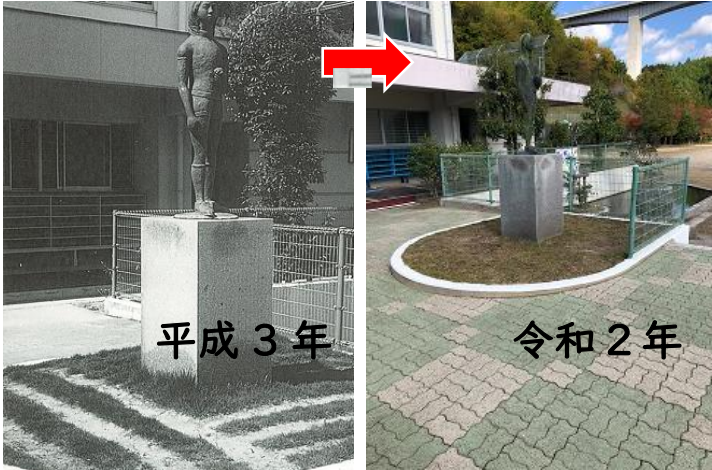
★建立時は白色文字で、約 40 年後の平成 23 年に当時の校長が彩色。120 年を節目に白で再彩色。

★校歌碑の周辺はリュウヒゲを植栽。管理は 3 年生。

★渡り屋根を 山田校務員 がこげ茶色に再彩色した。



<希望の塔>



- ・昭和62年4月3日（除幕式）
- ・常磐東小建設協力会からの寄贈

- ★材質はブロンズ製。ブロンズ像は極めて珍しく、他校でもあまり見かけない。
- ★ブロンズの価値は緑青を含めたもの。よって、洗浄はしていない。
- ★当時はリュウノヒゲを植栽。現在は芝。3年生が管理している。大活躍。

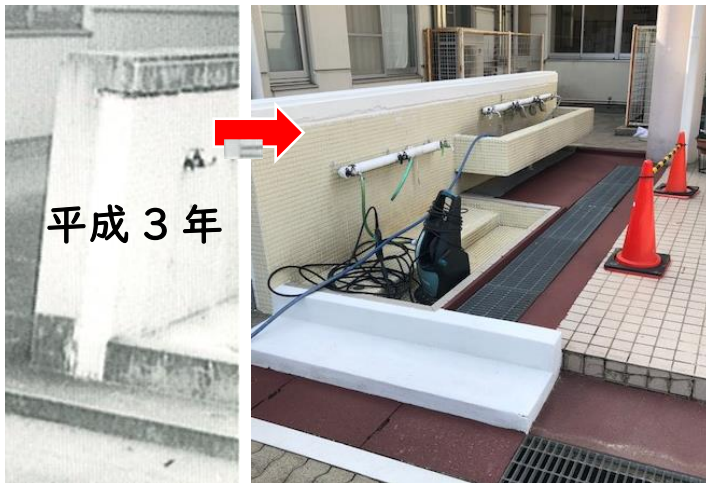
<体育館周り>



- ★側溝の蓋を「コンクリート蓋」から「グレーチング」に交換し、水はけおよび汚泥の流れの改善に着手。交換により段差が生じたため、塗装による色の違いで見極められるようにしてある。
- ★マンホール周辺の塗装はコケ繁殖の予防のため。

※茶色の塗装は、全て野中教員補助者によるもの。

<手洗い場周辺>



- ★手洗い場の外装（白色）および周辺（茶色）の塗装は、コケ繁殖防止のための対応。

※水場であるので、移転新築5年目(平成3年)で、すでにコケ繁殖の跡が見られる。

- ★高圧洗浄機は「マキタ製」。丈夫で強力であることを実感。

<その他> 正面玄関周辺もご覧のとおり。ここは移転新設時と肩を並べられたか。



常なる磐

つねなる いわ

令和2年11月27日(金)
その2

◇ photo で見ると 校内巡り【秋】



今、校内で最も美しい場所は玄関前。ドウダンツツジが深紅の光りを放っているよう。イチョウとアメリカカフウに代わる主役だ。



向かい側の創立120年記念植樹のカンツバキも、ドウダンツツジと競うように幼葉を伸ばし、コントラストが映える。



すっかり主役の座を譲ったイチョウとアメリカカフウであるが、イチョウの全盛期にはドウダンツツジはまだまだ深まりに欠ける。(11/4撮影)



全盛期が一斉にやってこないのが、秋のよさかもしれない。

ところでアメリカカフウであるが、あることに気付いた。下の2枚がその写真。



撮影日は同日。
11/12(木)

青木川側は真紅に対し、学校側は黄色を帯びている。

光の加減ではなく、明らかな葉色の違い。鑑賞は川側がベストである。

寒さを感じるこの時期に鮮やかなピンクの大輪を咲かせる花を紹介したい。
コウテイダリアである。



コウテイダリアは、皇帝ダリアとも表す。まさにダリアの王だ。

本校には、体育館東の常東ランドに向かう校地の一角に植栽されているが、
第21代校長の鈴木秋男先生からの贈り物である。

鈴木元校長先生が勤務された当時(昭和63年度～平成3年度)、本校にはコウ
テイダリアが学校を彩っていたそうである。そして昨年、先生の叙勲表彰の折に
来校され、コウテイダリアが無いことを察し、ご自宅で栽培され続けている株を
本校に寄贈いただいたという経緯がある。

創立120年を祝うかのように、本校での初年度開花である。

恥ずかしながら、自分はコウテイダリアの開花時期等の見識がなく、10月下旬
に下方の葉が変色していくのを見て、冬越しの作業に入っていくものだとばかり
思い込んでいた。そして今、驚きの大輪開花である。

鈴木元校長先生の思いとともに、コウテイダリアで忘れてはならないことが
2つある。

植え込みの隅にひっそりと佇む6年生が制作した木製看板とその後方にある
「支え」である。支えについては、最近施したもので、丈が伸びた茎が垂れない
ようにと山田校務員が気を利かせて対応してくれたものだ。

確かにコウテイダリアは美しい。

その美しさを支えるものがあることを忘れてはなら
ない。

様々な思いや人の手の加わりがあり、それらが絡み
合うことで「織り成す美しさ」なのである。



常なる磐

つねなる いわ

令和2年11月27日(金)
その3

◇ きっかけ② 記念式典に向けた準備の経過を振り返る

「きっかけ」というのは絶妙な存在で、その「きっかけ」を境に事が善きに転じることは多々あることである。

(※事が悪しき方向に転ずる場合、「きっかけ」は使わずに「発端」や「ひきがね」を用いる。)

ただし、「きっかけ」とするかどうか、できるかどうかは、その人に委ねられる。絶妙なタイミングだと悟って「きっかけ」とするのか、ぼうっと聞き逃し、見過ごして好機を逃すかは、受け手の心持ちが大部分を占める。

幾度となく好機を逃してきた自分であるが、今回(式典に向けた準備)は違った。

<ここから パート2 (その2編) >

地タイルの目地を埋めるのは汚泥だ。泥の上にコケが繁殖する。その上、目地の汚泥は雑草が生える温床となる。

①コケの繁殖 ②コケによる滑り ③雑草床 ④見た目の汚さ ⑤その他諸々
まさに地タイルの目地の汚泥(汚れ)は、様々なマイナス要因を抱えていることが分かった。

これを機(きっかけ)に、高圧洗浄のメインは「タイル汚れの除去」から「汚れ除去」+「目地洗浄」へと転換する。

作業は大変だが、思わぬ収穫を得る。雑草繁殖の勢いが格段に低下したのだ。この収穫は本当に大きい。本校で最も頭を悩ますのが、「草取り」なのである。

そんな折、作業用手袋の買い替えにホームセンターに立ち寄ったところ、次なる秘密兵器を見つけた。「除草剤」である。数年前に学校での農薬の使用が禁止になり、その通知が各校を悩ませている。そこで見つけた「除草剤」なる代物。

自分も商品棚の表示を見て初めて認識したのであるが、「農薬」と「除草剤」は明確に分類され、説明付きで陳列されている。効果は種類により様々であるが、この除草剤のいいところは、①葉や茎から吸収され、根まで枯らすこと、②土に付いた薬剤は分解され、無害となること、③薬剤が掛かった植物のみ有効であること、④農薬とは種を異にすること、である。ただし、使い過ぎは土を弱らせる。

この除草剤。ほんとうに優れもので、ツンツン頭のようなスギネやヨモギ？といった生命力の強いものにも効果を発揮(※立ち枯れに3週間程度を要す)する。

右の写真の赤枠は、若いスギナが生えていた所。今は面影がない。対して、周囲の樹木は元気である。



グラウンドに散布したところ、地下茎でつながる芝系の雑草にも(「にも」と言うよりはむしろ「の方が」)効果を表した。9月上下旬の2回(8日と28日)、寿会で環境整備を行っていただく10日ほど前に薬剤を散布したが、対応いただいた寿会の皆様にも、『いつもよりも草が抜きやすくて、いいわあ』と好評であった。

さらに、コケにも効果があることが確認できた。一石数鳥の投げ石だ。

雑草対応に頭を悩ますことがなかったら、おそらく見向きもしなかった除草剤。「きっかけ」と経験から得た「様々な要因」が重なっての発見であった。

さて、タイル洗浄に話を戻そう。

洗浄で発生するのが、汚泥を含んだ水、つまり泥水である。この処理は、側溝に流すしかない。しかし、あまりにも流れが悪い。よく見ると、なるほど納得。

側溝の蓋は2種類ある。金属製で網目状の「グレーチング」と「コンクリート蓋」である。グレーチングは隙間が多く、子供が指などを挟んでけがをすることを避けるために、学校ではコンクリート蓋を用いることが多い。本校も例外ではなく、ほとんどがコンクリート蓋である。できるだけ隙間をなくすようにはめ込まれた蓋に加え、排水用の穴はごく小さい。機能的には最小限と言える代物だ。当然、排水穴はすぐに詰まる。小石が詰まり、穴すら確認できないものもある。

洗浄作業で苦勞しているさ中、体育館裏手で、野ざらしのグレーチングを20枚ほど見つけた。どうやら山側の側溝は詰まりがひどく、清掃のために取り外したとのこと。「しめた！ 蓋の交換だ」と、すぐに市教委の施設課に交換業務を依頼。

排水はすいすい。見た目もすっきり。白のラインを塗装して児童に立ち入り禁止を伝え、事故の未然防止に努めた。



そう。除草剤の時と同じ。

苦勞していなかったら、見向きもしなかったであろう「野ざらしの汚れたグレーチング」。再利用どころか、廃棄等の処分方法を考えたかもしれないのだ。

その2の結論 「きっかけ」をつかむと好転し、好転は他に波及していく。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月 4日(金)

◇ 脚下照顧 (きゃっかしょうこ)

京都がメインとなる通常の修学旅行。今年は「奈良オンリーの【奈良で学ぶ旅】」。6年担任の伊藤先生が苦勞して計画した一泊二日の旅程であったが、振り返れば、学び深き修学旅行、心に残る修学旅行となった。

私個人の見解では、【奈良再発見】【また行こう、奈良】【大好き奈良】である。

最初の訪問地「飛鳥村」の【飛鳥寺】は、ある意味、強烈な印象が残っている。

本堂に通され、副住職から飛鳥寺にまつわる講話をいただいた。これがなかなか面白く、20分にも及ぶお話はかなりの聴き応えがあったが、伊藤先生によると『今日は修学旅行生相手だからサービスしてくれています。通常の倍はあります』とのこと。礼儀正しい子供たちの中でも、長光寺の長男〇君は背筋が伸び、正座姿勢が一際よい。副住職から「足を崩していいよ」と伝えられても、膝を崩さなかったのは流石だ。大変立派。ただし、起き上がりに苦勞していたが…。

ご本尊の飛鳥大仏は日本最古。後に、東大寺ガイドから「大仏」の基準を聞き、あとで納得する。飛鳥寺の開基は蘇我馬子。ともに政（まつりごと：政治）を担った聖徳太子像があるのも頷けた。

帰り際に、どこかの女子校の修学旅行生の団体とすれ違う。

彼女らにまつわる話が、本号のタイトル【脚下照顧 (きゃっかしょうこ)】である。

☆脚下照顧 (きゃっかしょうこ)

<意味>

- ・ 禅語
- ・ 自分の足元をよくよく見よという意。
- ・ 『他に向かって悟りを追求せず、まず自分の本性をよく見つめよ』という戒めの語。





飛鳥寺には、来訪者用の靴箱もあり、本校はこちらを利用した。

来訪者も少なく、余裕があったはずであるが、彼女たち一行は、ごらんのように靴を整えた。

まさに、一糸乱れず。

靴を整える様は、整えられた靴以上に美しく見えた。

そして、整えられた靴が、「彼女たちの学園での学び」と「学園が大切にしていること」を伝えている。

毎日、毎日、いつも、何時も、学園でも、家庭でも、場を問わず継続して行ってきた本物の足跡がここにあるのだ。

「素晴らしいですね」とだけ彼女たちに伝え、その後、飛鳥寺の関係者に「どちらの学校の修学旅行ですか」と学校名を尋ねると、「宝塚歌劇団の学生さんです」と返ってきた。

「なるほど納得」である。

帰り際に本堂をこっそりのぞく。修養によって整えられ、鍛えられた心が伝わる彼女たちの合掌姿である。

〇君も、これにはかなわない。

※ちなみに利用していた観光バスは「阪急交通社」。さすが親会社である。



常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月 4日(金)
その2

◇ きっかけ③ 記念式典に向けた準備の経過を振り返る

「きっかけ」というのは絶妙な存在で、その「きっかけ」を境に事が善きに転じることは多々あることである。

(※事が悪しき方向に転ずる場合、「きっかけ」は使わずに「発端」や「ひきがね」を用いる。)

ただし、「きっかけ」とするかどうか、できるかどうかは、その人に委ねられる。絶妙なタイミングだと悟って「きっかけ」とするのか、ぼうっと聞き逃し、見過ごして好機を逃すかは、受け手の心持ちが大部分を占める。

幾度となく好機を逃してきた自分であるが、今回(式典に向けた準備)は違った。

<ここから パート3 (その3編) >

門柱や壁面および地タイル洗浄を行って気付いたことがいくつかある。

一つは、汚れやコケが雨で流れ落ちそうな直立する壁でもコケが付きやすい箇所があるということだ。風雨や太陽光等で塗装が劣化した箇所である。

【雨垂れ 石を穿つ (うがつ)】ともいうように、幾重に塗り重ねた塗装が剥がれた上に塗装下のコンクリートもざらつくほど傷んだ箇所がある。

ここは表面の凹凸が大きく、そのため埃やコケが付くと取れにくく、コケ繁殖の温床になりやすい。



右は、校門の左側、消火栓のある壁の修復途中(高压洗浄後・塗装途中)の写真である。黒く見えるのはコケではなく、塗装が剥がれてコンクリート地が露出しかけている部分。塗装した部分は、塗装剥離が激しく、全面補修の前に先行補修した部分。かなり傷んでいた。

校舎壁面も同様の理由がある。壁面自体にも凹凸はあるが、経年劣化による塗装剥離でコケが付きやすい状態になっているのだ。

赤色線の上部が洗浄前の状態、下部が洗浄した部分である。校舎壁面は壁面自体の劣化があるので、残念ながら、まめに洗浄するしか手はない。



二つ目は、実はコケが付きやすいのがコンクリート面であるということ。



写真は、洗浄前の学校を囲むコンクリート壁面である。草木が生える上部の法面から土が流れ落ちるせいもあるが、まともに風雨や太陽光の影響を受けるため劣化が激しく、上の写真のように垂直面でもコケは繁殖する。

下の写真は洗浄後の現在の状態である。

きれいに見えるが、コンクリート面上部の劣化は激しく、コンクリートに混ぜ合わせた小石がところどころに顔を見せるほど削られている。

対応は洗浄以外にはないが、建設当時に壁面が塗装されていれば劣化は少なかっただろうに、残念である。

コンクリート面がコケ繁殖の温床になりやすいことを受け、手を打ったのがコンクリート面の塗装である。実は、これが【補修作業・最大のヒット】となった。【善き方向への思わぬ収穫】である。



補修箇所は、正門・西門の下部、壁面の下部、側溝のコンクリート蓋などのコケが繁殖しやすい部分。この見極めは容易で、高圧洗浄機による洗浄作業の経験が生きた。 【塗装すべき箇所】 = 【洗浄で苦戦した箇所】 というわけだ。

「きっかけ」は遊具の塗装。塗装が剥げ掛かり、凹凸があるのにコケは生えない。つまり、マット感のある水性塗料ではなく、【光沢のある油性塗料】を使用すればいいということ。さらに、山田校務員が再塗装した体育館への渡り屋根の油性塗料の残りがあったこと。加えて、野中教員補助者が手伝ってくれるとの申し出。

式典まで3週を前に、3人体制でのラストスパートが始まったのである。

その3の結論

「きっかけ」をつかみ、事が好転すると、人が助けてくれる。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月11日(金)

◇ 全校集会にて【ウサギとカメ】

師走12月の全校集会(朝会)。 児童への話は、「【ウサギとカメ】」について。

12月です。 2020年の最後の月です。 最後は「しめくくり」が大事です。今年1年間でたくさんのことを学びました。 だから今が、今年で一番力があります。学校での生活も、家での生活も、これまでで一番頑張れる時です。自分の、学級の、家での「あたりまえ」を意識して生活し、いいしめくくりをなささい。

今日は、童話「ウサギとカメ(イソップ童話)」の話です。 一度は聞いたことがありますね。ウサギとカメで山のふもとまで競争をする。足の速いウサギは、足の遅いカメを見て余裕で勝てると思い、途中で居眠りをする。その間にカメは着実に進み、ウサギが目を覚ました時には、カメが先にゴールをしていた、という話です。

この話は、「いくら力があっても、油断をしてはいけない」ということ。 それから、「あきらめないうで頑張れば、最後には結果が得られる」ということを教えてくれています。

「ウサギとカメ」の話は、もう一つ、大事なことを教えてくれます。

競争の途中でウサギが途中で休憩する前、ウサギは後ろを振り返り、どんどん離れていくカメを見えています。それに対してカメは、ゴールを目指しています。カメが見ているのは前。

カメはひたすら「ゴール」を見ていたのに対し、ウサギは「カメ」を見ているんです。だから、カメはウサギの横を通り過ぎる時も、ウサギを見ていないと思います。「今のうちに先に行かないと、またウサギに抜かれてしまう」なんてことも考えていないでしょう。「ゴール」だけを見て頑張ったのがカメ。 競争相手のカメを見ていたのがウサギ。「目標」だけを見て頑張ったのがカメ。 「目標」がかすんでしまったのがウサギ。ウサギとカメは、「目標の見方」が違うのです。

ゴールした後のカメはどうだったのでしょうか。ウサギに競争で勝って、大喜びしていたのなら、これは間違いです。 あわてて、そして遅れてゴールにたどり着いたウサギに拍手を送っていたのなら最高です。

何かをするとき、何かを頑張るとき、大事なものは「目標」をもち、もてる力、備えた力を尽くすことです。 「あたりまえ」のことを「あたりまえ」に、最後まで行うことです。

12月は、1年で一番力があります。

「目標」をしっかりもち、その力を「目標」に向かって力の限り発揮し、2020年をしめくくりなさい。

【相手】を視野に入れず、【目標】のみを見据える。 己への戒めでもある。

余談ではあるが、イソップさんに話ができたのなら、一つ注文がある。 競争のゴールが下方の「ふもと」ではなく、見上げた「頂上」だったら、さらによかったのでは…ないかい。

【おまけ】滋賀県豊郷小学校 旧校舎の【ウサギとカメの階段】 ※とあるブログより転載

①スタート



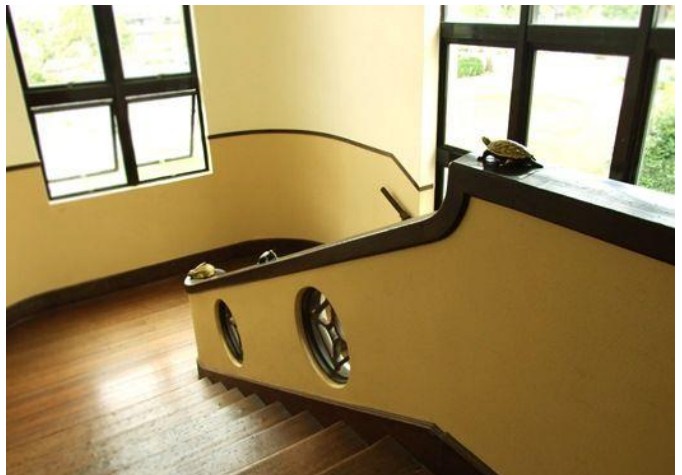
②居眠りするウサギ



③坂道を登るカメ ※ほら、こっちがいい



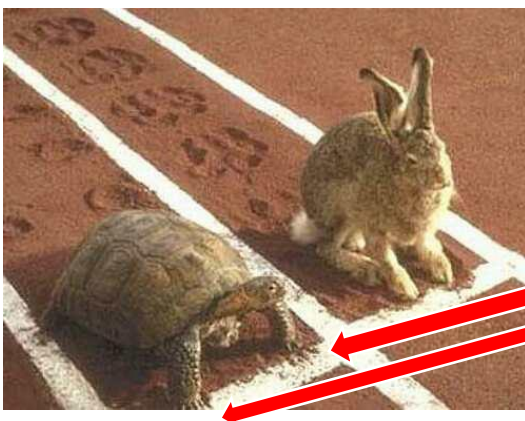
④居眠りするウサギを見下ろすゴール後のカメ



なかなかセンスのある学校だ。

現在は、【豊郷町立図書館】とのこと。

【おまけ その2】 ※とあるブログより転載



スタートの写真かと思いきや、
両者の後方には、足跡。

ほんのちょっと先に、カメがゴールしている。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月11日(金)
その2

◇ きっかけ④ 記念式典に向けた準備の経過を振り返る

「きっかけ」というのは絶妙な存在で、その「きっかけ」を境に事が善きに転じることは多々あることである。

(※事が悪しき方向に転ずる場合、「きっかけ」は使わずに「発端」や「ひきがね」を用いる。)

ただし、「きっかけ」とするかどうか、できるかどうかは、その人に委ねられる。絶妙なタイミングだと悟って「きっかけ」とするのか、ぼうっと聞き逃し、見過ごして好機を逃すかは、受け手の心持ちが大部分を占める。

幾度となく好機を逃してきた自分であるが、今回(式典に向けた準備)は違った。

<ここから パート4 (その4・最終記) >

実のところ、地タイルの洗浄を始めた5月当初、正門の補修計画はあった。

しかし、児童昇降口前のピロティー整備や校舎壁面の洗浄、校内各所の壁面塗替えまでの考えはもっていない。

補修・修繕の拍車がかかったのは、やはり「きっかけ」が重なるのだ。

それは、9月5日(土)のこと。PTA資源回収とPTA役員会を終え、前日に行った「正門の校名石板塗装」の仕上げ作業を行っていたところ、役員会を終えて帰路に就くPTA役員のUさんが、補修された校名石板を見て話された。

※Uさんの会話の部分は、からっとした明るいイメージ。

U： 校長先生、何をされているんですか？

私： 学校名の塗り直しです。

U： すごいじゃん。 先生がやったの？

すごいきれいじゃん。
すごい。 すごい。 ※めちゃくちゃ褒め上手

私： ありがとうございます。

U： 一人でやったの？ すごいじゃん。 で、終わったら、他に何かやるんですか？

私： 正門だけは白色に塗り直す計画があります。

U： いいじゃん。 正門が終わったら、もっとどんどんやったら？

そうだ。 いっそのこと、学校全部塗り替えちゃったら？ あははは…(笑)

私： 全部？ んー、やっちゃいますか？

U： どんどんやっちゃん、学校全部。 あはははははは…(W大笑)

もちろん冗談を含んだやりとりだが、褒める時は、照れを超えてこちらが気持ちよくなるくらいにUさんは褒めてくれた。

文字色の変化に子供が気付くのは想定内。ただ、保護者が喜んでくれることは全く想定していなかったため、褒めてもらえた意外さが喜びを増大させた。

嬉しさに加え、『本番は正門だから、練習としての手始めにどこかで試してみるか』という思い、そして、記念式典を屋外で行うことが決定した時期も重なり、『じゃあ、体育館渡りの通路壁でも試しに塗ってみるか』ということになる。

元来、ものづくりは好き。さすがに壁塗りは経験なかったが、子供の頃からプラモデルの塗装はしてきて、体や衣服が塗料で汚れることは全く気にならない。加えて、十分すぎるくらい木製品にニス塗ってきた経験から、刷毛の扱いについても問題ない。それどころか毎年のように生徒に教えてきた。こうした様々な要因が重なり、眠りかけていた血が騒ぐというか、呼び起こされてゆくのだ。

こんな経緯で校内各所の補修を手掛けたわけではあるが、振り返ってみれば、何気ないUさんとの会話が、最初の、そして大きな「きっかけ」になったということだろう。

そして、式典を10日後に控えた式典実行委員会後のこと。また、Uさんは褒めてくれるが、得意の冗談交じり調で、まさかの一言を織り込んでくる。

※Uさんの会話の部分は、からっとした明るいイメージ。

U： 校長先生、めちゃくちゃきれいになったねえ。

私： Uさんに言われたように、学校丸ごと全部というわけではないですけどね。

U： まだ、一週間ぐらいあるじゃん。校長先生、頑張る。あと、一週間あるよ。間に合いそうもなかったら、ペンキを上から掛けちゃえば？ あははは…(笑)

私： そうか。ペンキを上から掛けちゃいますか。あははははは…(W大笑)

はじめの「きっかけ」はUさんの一言。

そして、最後のラストスパートの「きっかけ」もUさんにいただいたわけだ。

式典当日。苦勞を全て払拭させる言葉を保護者からいただくことになる。

『私が小学校4年生の時に、この学校ができたんです。

常磐小から転校する形で常磐東小に通うようになって、その時は学校が真っ白だったんです。それを今でも、よく覚えています。

また、その姿が見られるなんて。ありがとうございます。』

4回にわたり、冒頭で

「きっかけ」とするかどうか、できるかどうかは、その人に委ねられる。

絶妙なタイミングだと悟って「きっかけ」とするか、ぼうっと聞き逃し、見過ごして好機を逃すかは、受け手の心持ちが大部分を占める。

などと偉そうに綴ってきたが、大きな間違いであったことに気付いた。

語り手の伝え方が、やる気の「きっかけ」の大部分を占める と言い換えたい。

授業も同じ。行事も同じ。子供をやる気にさせる「きっかけ」を教師が作れるかどうか、伝えられるかどうか。それを考えさせられた【きっかけ】となった。

Fin

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月18日(金)

◇ 受け継ぐ という事 受け渡す という事

長放課も昼放課も、赤白帽をかぶった児童がグラウンドを駆け回っている。
今、子供たちの中では、「鬼ごっこ」がブームなのだ。元気いっぱいな姿で走り回る子供の姿は実にいいもので、見ていて元気が湧いてくる。
本校のよいところは、遊びが学年を超えて一緒にできること。低学年ばかりが鬼にならないように、ルールらしきものがあるのも素敵である。

最近では、登校後の始業前の自由時間も鬼ごっこ。いち早くブランコに向かう姿は、今はもうない。どうやら、1年生の一輪車ブームも過ぎ去ったようだ。
記憶をたどると、鬼ごっこが始まったのは「駆け足訓練」が始まった頃と時を同じくする。訓練中は、駆け足が終わった直後。もしかすると訓練よりもハードな連続の鬼ごっこである。すごい。子供のエネルギーは、本当に底知れない。

よく見ると、グラウンドに姿があるのは1年生から4年生の子供たち。5・6年生の上級生の姿はない。おにいさん、おねえさん世代は鬼ごっこに興味がない？ いや、そうではない。遊びに加われば、下級生の面倒をよくみて、より楽しさが増すような配慮ができるのが本校の5・6年生である。

キャッキヤ、キャッキヤと甲高い声をグラウンドに響かせるのが1年生から4年生。5年生と6年生は、2階のオープンスペースで楽器を奏で、心休まる音楽を校内に響かせる。今は校歌の演奏。数度しか耳にしていない校歌ではあるが、5・6年生の演奏のおかげで、もうすっかり耳になじみ、音程を把握できた。

記念式典以降、昼放課は校歌演奏の練習がずっと続いている。大したものだ。
褒め、讃えることができる部分は、継続して行っていることほかにある。それは、練習に取り組む5・6年生の姿勢。まさに、姿から真剣味が伝わってくる。
寄り添い、手取り足取り、自分が備えた技を伝授する6年生。そのエネルギーを真正面から受け止め、自分のものにしようと努める5年生。真剣勝負である。

6年生のエネルギーは、自分が演奏に注ぎ込んできたエネルギーだけではない。
今、中学校に通う中1の先輩から授けてもらったエネルギーが加わっている。
教えてもらったことを教えていく。伝えてもらったことを伝えていく。本校が長い年月をかけて醸成してきた伝統がそこにあるのだ。

5年生に伝わり、5年生が受け止めることができるのには理由がある。
1年に及ぶ合同練習を通し、6年生が鼓笛演奏にかけてきた情熱の熱量を感じ、知っているからである。
受け継がれてきたものを「受け継ぐ」責任がそうさせるのだ。これも伝統だ。だから、教員は付きっきりでなくてよい。見守ればよい。なぜなら、そこに子供たちの【自主】が存在するからである。

タイトルには、敢えて「引き渡す」ではなく、【受け渡す】と書いた。
「引き渡す」というのは、自分の手元にあるものを、ただ相手に「渡す」行為。
「受け渡す」のと、全く意味を異にする。
「受け渡す」とは、相手に「渡す」だけでなく、相手からも何かを「受け取る」ことを意味する。

6年生は技を伝え、思いを託すだけでなく、5年生からもらっているものがあることを忘れてはいけない。
6年生の思いに応える【5年生の思い】である。

5年生に渡しているようで、実は5年生からいただいている。
その時はよく分からないが、あとになってよく分かる。でも、それでいい。

授ける(さずける)という字に【受(ける)】があるのは、そういうことだと思う。

授業は「業を授ける」と書く。
授業を通し、『子供から力を受けていることを我々は忘れてはならない』と戒めた。